

しかし、データが示していることの理解とその検討にもう少し時間を割くべきであったと反省させられたコメントが、授業後ある学習者から寄せられた。それは「留守児童は意外と本を読んでいる様だった」というものである（下線は筆者）。この学習者はどういう意味で「意外と」と書いたのであろうか。余暇の過ごし方として、一人で読書するしかない寂しい留守児童の姿が目には浮かんでいるのかどうか、気になった。もし、読書時間が長いことをプラスにだけ捉え、「親の目が届かない子供は本など読まずに遊んでいるものと思っていたのに、意外と長時間読んでいる。真面目だな、偉いな」という印象だけで発したコメントであれば、この学習者が留守児童問題に関して真に理解したとはいえないのではないだろうか。留守児童の読書時間についてのデータ（以下の表5 南方周末編 2016:290の円グラフを翻訳して表にしたもの）は、そもそも週単位なのか、一日単位の時間なのかが不明であるが、それに気付く学習者がいなかったことも残念である。メディア・リテラシーの養成についても今後の課題としたい。

表5 留守児童の読書時間・誰と一緒に読書をするか
（南方周末編 2016:290 より）

1～2時間	3～4時間	1時間以下	5時間以上	→1週あたりか 1日あたりか不明 (合計100%)	
38.5%	20.7%	22.2%	18.6%		
一人で	同級生や友人と	閲覧室の職員と	親と	先生と	祖父母と
68%	21.7%	4.1%	3%	2.2%	1%

4.4 学習者は CLIL 的アプローチをどう受け止めたか

前期の最後に、一番やりがいのあった課題、面白かったテーマをコメントカードに書かせたところ、「留守児童」を選んだ学習者が一番多く、全体の約4割を占めた。前期後半の授業を3回も使って扱ったこともその理由の一つであろうし（前期は通常1テーマ1回完結型にしている）、テレビ番組の視聴が印象を強くした理由だとも考えられる。様々な教材を用い、ジグソー・リーディング等いつ